

尚文昌武で三兎を追う母校!

●読売新聞で3回にわたり掲載!

毎週金曜日の読売新聞朝刊・地域版には、「いま学校は」というコーナーがあり、県内の各学校が紹介されます。3月21日から4月4日までの3回は母校「浦和高校のいま」が特集されていました。私も高校時代にもう少し何かに熱中していれば…。そんな母校の記事を抜粋してご紹介…。

* *

◆自主性育む 教えすぎない授業 (3月21日)

■自分で考える

カンカン、カン——。2月下旬、校舎一階の工芸室に金づちの音が響き渡っていた。2年生の工芸の授業。木工作品の仕上げ段階で、黙々と作業に打ち込む眼は真剣そのものだ。▼工芸室の特徴は、ノコギリや金づちなどの工具がほとんど用意されていないこと。工具は1年の初めに、それぞれが必要だと思つたものを、ホームセンターなどで自由に調達する。作品に使う木材なども、自ら準備する約束だ。個人の工具箱は授業で制作したもので、管理も自分たちで行う。▼「何事も自分で考えさせること」。重要無



形文化財(人間国宝)の認定を受けた金木作家の増田三男さん(1909~2009)が教鞭を執っていた44~76年当時から受け継がれ

ている伝統だ。工芸科の原島秀行教諭(48)も「増田先生に倣い、教えすぎないことを心がけている」と語る。(中略)。▼自ら考え、学ぶことを重視する教育方針は、他教科にもみられる。数学や化学では、グループ別に違う角度から課題を検討し、それぞれが理解した知識を教え合う「協調学習」を実施。他にもプレゼンテーションなど、自主性を高める学習方法をできるだけ取り入れている。

■追うは「三兎」

このようにハイレベルの授業に加え、毎月行事があり、部活動がある。「三兎を追え」という教育理念の下で多忙な毎日過ごす浦高生の最初の課題は「生活リズムをつかむこと」(杉山剛士校長)だという。▼時間を有効に使うため、朝や部活後に勉強する生徒が多い。午前6時半頃には生徒が集まり始め、7時半の時点では半数以上の生徒が自習に励む。1年の頃から自学自習の習慣を身に着けて生徒の多くは、受験前の家庭研修期間にも毎日登校し、友人と勉強する。数人で時間割を作って学習する生徒もいるという。▼予備校で受験対策する浦高生は

少ない。それは生徒たちが「授業をしっかり受ければ大丈夫」という伝統を信頼し、「日々の授業や学校生活に全力で取り組んでいるから」(進路指導主事の宮崎裕教諭)だという。

* *

◆生徒主導の部活動 (3月28日)

進学校として知られる浦和高校だが、部活や同好会は計40団体以上あり、生徒の加入率も9割を超える。ラグビー部の全国大会出場や、剣道部のインターハイ出場などここ数年、活躍が目立つ運動部だけでなく、全国大会常連の囲碁将棋部や、クイズ研究会などの文化系活動も盛んだ。

* *

この日の紙面では、グリーン・クラブとボート部のことが取り上げられていました。



* *

◆各界で活躍 3万人のOB (4月4日)

浦和高校はこれまで、約3万人の卒業生を輩出してきた。OBは経済界や政官界だけでなく、研究者や文化人、芸能人などとして幅広い分野で活躍している。「ゴダイゴ」ボーカルのタケカワユキヒデさんや、宇宙飛行士の若田光一さんなど著名人も多い。今回は多様な浦高OBの中から、心臓外科医の天野篤さん(58)とアニメ脚本家の富田祐弘(すけひろ)さん(65)に話を聞いた。

* *

■クラス団結 思いやり培う [天野篤さん]

今振り返ると、高校から大学時代の経験はすべて、医師になった現在にも生きていて感じる。多様な課題に取り組みさせて生徒の引き出しを増やそうとする浦高の数学の授業では、「今の実力以上のことはできない」ということを学んだ。▼高校時代に芽が出なくても、何らかの分野で、必ず自分に合う「器」を探してほしい。そしていつか、多くの浦高生が、歴史に名前を残せるようなものをつかんでくれると信じている。

■鼻っ柱折られた3年間 [富田祐弘さん]

絵が得意だと自負していたが、同級生で日本画家の内藤五瑠(ごろう)を見たときには、デッサン力の違いを思い知らされた。浦高生のレベルの高さには鼻っ柱を折られた。▼高校時代の後悔は、熱中して何かやれば良かったということ。だらだら過ごすのではなく、何か一つでも興味を持ち、突き詰めておけば良かった。高校の3年間は長いようで短い。夢と情熱を持って、一つの物事に熱中してほしい。